



# 「こころを一つに平和を宣べ伝えよう」

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会 常任委員会

## < 目次 >

### 1. お知らせ

献堂50周年記念誌の写真募集(再掲) .....2

### 2. 聖堂建設の歴史シリーズ

宗教的雰囲気の源泉 .....2

平和記念聖堂の建築工事 .....3

### 3. ラッサール神父の思い出

Sr.レティチア天野のお話し .....5

### 4. 「献堂50周年を迎える祈り」

今月の祈り .....7

### 5. 資料紹介

「日本の宗教とカトリック教」(1~8巻) .....8

(愛宮 真備 著)

### 6. 部会だより

<総務部会> .....8

<平和活動部会>

<記念誌部会>

「平和への道は、神への道です。」



<写真左>

1956年8月5日 原爆犠牲者慰霊及び世界恒久平和祈願式典において原爆慰霊碑の前で説教をするラッサール神父

司教館所蔵(斉藤教区長秘書撮影)

(写真右)元安橋を渡る平和行進

(1956年8月5日原爆犠牲者慰霊及び世界恒久平和祈願式典の後、信者が提灯を持って、聖歌を歌いながら記念聖堂まで行進した。)

司教館所蔵(斉藤教区長秘書撮影)



## お知らせ(再掲)

### 献堂50周年記念誌の写真募集

募集する写真の内容:

世界平和記念聖堂の建設当時の募金活動、建設工事、平和祈念祭や献堂式などの写真

世界平和記念聖堂で行われた行事、司祭や信徒との交流、献堂25周年、神冥窟などの写真

写真の形態:

- ・写真は、形式・形態を問いません。
- ・アルバムのままお送りいただいても結構です。

提出方法:

- ・写真等を封筒に入れ、住所、氏名のほか、写真等の点数、各写真の撮影日、撮影者、写真の説明を写真の裏か、別の用紙にご記入下さい。(提出された写真等は、返却いたします。)

締め切り: 2004年10月31日

送付先: 〒730-0016 広島市中区鞆町4-42

カトリック広島司教区

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会  
記念誌部会宛

問合わせ: 広島司教区本部事務局 写真募集係

(電話 082-221-6017)



(1956年教会運動会でのラッサール神父)

## <聖堂建設の歴史シリーズ>

### 宗教的雰囲気の源泉

世界平和記念聖堂は、設計者村野藤吾氏の代表作の一つです。昭和28年(1948年)に行われた聖堂の設計競技においては、1等当選者が出なかった。

「近代的、日本的、宗教的、記念的」という難しいテーマであったが、これに応じて多くの応募があった。「宗教的と日本的の点が弱い」とする教会側の意見で、当選者が出なかった。審査結果の公表直後から「1等なしは不公平」という批判が起きた。その後、教会側の意向で、村野藤吾氏が設計を担当することになり、風当たりは一段と強まった。彼は、審査委員の一人でもあったので、当時の建築界で大きな論争を引き起こした。

このような批判の中で、村野藤吾氏はどのような想いで設計を進めたのであろうか。ここに聖堂建築中の1953年に再度ストックホルムを訪問された時の手紙が残されている。同じく審査委員の一人であった早稲田大学の今井兼次氏に宛てたもので、今井氏が「村野氏の追悼文集」の中で紹介している。

「ストックホルム市庁舎に行ったその翌日、私はさらにヘガリット教会を見ました。

(中略)

その扉をカ一杯押して入るなり、まるで敬虔な信者がするように腰がくだけてひざ頭は思わず石敷きのような硬い床についてしまい、長椅子に手を支え、その上にひたいを重ねて思わず祈りの言葉が私の口から洩れているのに気がきました。『どうか、私にも此の教会の作者のように才能を与え給え、どうか私の努力が死ぬまで枯れずに続くように導き給え』と祈りました。私は祈りらしい祈りが自然にしかも無意識に私の口をついて出たのは生まれてその時が始めてでしょう。

会堂の内部は、その時私の目には渋い紫がかかった銀色に見えました。漸く気を取り直してパイプオルガンを、照明器具を、壁画を、洗礼盤を、祭壇を、丁度、目の不自由な人が心の『かん』で読み取るように眺めたのです。

その夜、私はこの感激を日記に書いているうちに涙が - - 私はこの歳になってこんなことを貴方に書

いて送るのは、ほんとうに恥かしいのですが - - ほほをつたわって流れるのをどうしようもなかった位です。今まで恥かしくて誰にもいえなかったストックホルムでの感激の一端を、ついもらしてしまいました。御笑い下さい。」



(ヘガリット教会の内陣 石丸紀興氏撮影)

この時には、すでに聖堂の躯体工事は概略できあがっており、この感動は、その後の内装工事などの設計に生かされたであろう。長い年月を経て今なお「理屈ではなく、心から自然に出てきた」宗教的な敬虔さを備えた聖堂から村野藤吾氏の聖堂設計への真摯な取り組みを窺い知ることが出来る。実際、村野の言葉通り、補修と年を重ねるごとに、深みを加え、聖堂は、ここを訪れる人に平和を祈ることを呼びかけている。

「わたしは、この建物がとても好きです。本当に宗教的な感じなのです。教会は時代によっていろいろな形があって、飾り物が多すぎるとかありますが、この聖堂は、一つの厳しいところがあると同時に、落ち着くところがあります。」とラッサール神父も1983年の講演会で述べている。

「村野先生は1980年8月3日、アッシジの聖フランシスコを霊名に頂き、フーゴー・ラッサール神父様により洗礼を受けられました。尊敬する長年の友人と更に同じ信仰によって結ばれましたことはこの上ない喜びでありました。そして、かつてのヘガリット教会での先生の祈りは聞き入れられ、その才能、努力は生涯枯れる事なく続き、帰天のその日まで御元気で働いて居られたと伺い、真に幸福な方であったと思いました。」と今井兼次氏は追悼文集に親しみを込めて書かれている。

### 平和記念聖堂の建築工事

1952年度の建設委員会の中間報告に、「昭和25年(1950年)8月6日に幟町の広島カトリック教会敷地で、世界平和を祈念するための平和記念聖堂の定礎式が挙行されてから、満二カ年を迎えようとしています。実際に建設工事に取りかかったのは、同年10月8日の地鎮祭、鍬入式に始まりますが、幾多の支障を乗り越えて大体予定通り会堂並に塔屋その他の附属設備等の外部工事を完了しました。」とあります。

この二年間に、幾多の支障があり、工事は遅れました。その支障とは、ほかでもなく地下水の問題でした。現代ならボーリング調査など地盤調査によって、徹底的な対策ができますが、当時はそのような調査がむずかしく、戦前に建築された周辺のコンクリート建築物を参考にしていたらしい。ところが、基礎工事を始めようすると地下水が地面まで出てきた。それでいろいろ対策を講じるための時間がかかり、費用もかなり必要となって、基礎工事は数カ月も長引いてしまった。

この基礎工事に関しては、清水建設の担当者であった岡崎武司氏が、「構造設計を担当された早稲田大学の内藤多仲先生の立ち会いのもとに基礎部分の数カ所で13ミリの鉄筋棒を手から血が出るほど何回か地盤に突き刺し、鉄筋の貫入状態をみて地耐力を判断された。地耐力8トン/㎡で、一部地盤改良と基礎を広げて、荷重を平均化する方法が決定された。」と話している。なお、記念聖堂は、杭を打たない構造となっているが、予算がないからと云う理由だけ



(地盤調査の様子 清水建設提供)

ではなく、革新的な理論の裏付けの中で構造設計されている。村野事務所の構造担当であった前川陽一郎氏は、当地が軟弱地盤であったことは、すでに分かっていた。砂地盤というのは押さえつけられると横に逃げてしまう。横に逃げない方法を探れば、地耐力が与えられる。内藤多仲先生の弟子の南先生が土質工学の理論から考えられた筒基礎方式によって土地が横に逃げない工法を採用したと話している。



(地盤改良工事 清水建設提供)

基礎工事がほぼ出来上がったころ、朝鮮動乱の影響で資材が高騰し、資金が足りなくなった。塔の建築をやめてそれを第二期工事としようかという相談さえあった。ところが、塔のためだけに募金することはむずかしいので、何か最も必要な所、たとえば聖堂内の床工事を延ばしたら、という案も出された。この工事中断の時の話を清水建設の工事主任であった菊地辰弥氏は、次のように記している。「当時は、予算の中で如何に実現するかを苦労した。朝鮮戦争による物価の高騰があり、鉄骨・鉄筋は4倍、セメント3倍も値上がりした。請け負った以上は完成しなければならない。契約更改を東京のラッサール神父のところを持っていったが、認めてもらえなかった。全世界の浄財による工事だったので、社長の清水康夫に話したら、このような建物を工事することは、名譽なこと、損得の勘定ではない。先生の云うとおりやれということだった。ラッサール神父は、原爆の犠牲者のため、戦争犠牲者のために取り組んでいる。東京の帰り、大阪の村野事務所、皆泣き出した。或る日ついに、工事は中止の止むなきに至ったとき、悄然とされるラッサール神父を見て、是

非、実現しなければならないという決意でした。

聖堂は、彫刻的な建築なので、いろいろなものを外注するわけに行かない。現場で創意工夫しながらやって行くことにした。みんなが喜びを持って聖堂建設に当たってくれた。」と。

朝鮮動乱は、鉄筋や鉄骨など資材の調達も困難にした。このため、この塔では、鉄骨を使わず、純鉄筋コンクリート造としている。塔は、45mの高さであり、現在の基準では、鉄骨鉄筋コンクリートでなければ認められない。内藤先生が戦前に設計した日本興業銀行は、鉄骨鉄筋コンクリート造の第1号建物で、関東大地震でも崩壊しておらず、アメリカの考え方で作られた建物が崩壊した事実からも、鉄骨を使う有効性は分かっていたが、予算がない中で、鉄骨を使わない選択をした。屋根裏の鉄骨トラスも一般的に使われるアングル材で作られている。よく見ると穴のあいたものもある。資材がなかったので、軍の払い下げ材を使わざるを得なかった。

このようにして、塔も出来上がり、少しずつ内装工事も進み、さまざまな問題を乗り越えて、いよいよ1954年8月6日に献堂式を行なうことになった。



(ドームの鉄骨組み立て 清水建設提供)

注) 出典

チースリク神父「広島平和記念聖堂への歩み」(幟町教会報「平和の鐘」第286号)

追悼文集「村野先生とわたし」(昭和61年2月、村野、森建築設計事務所 制作・発行)

清水建設社内報「世界平和記念聖堂を顧みて」

世界平和記念聖堂の建築をめぐる対談と講演 = 記録ビデオ (建築家村野藤吾さんと世界平和記念聖堂を語る会 編)

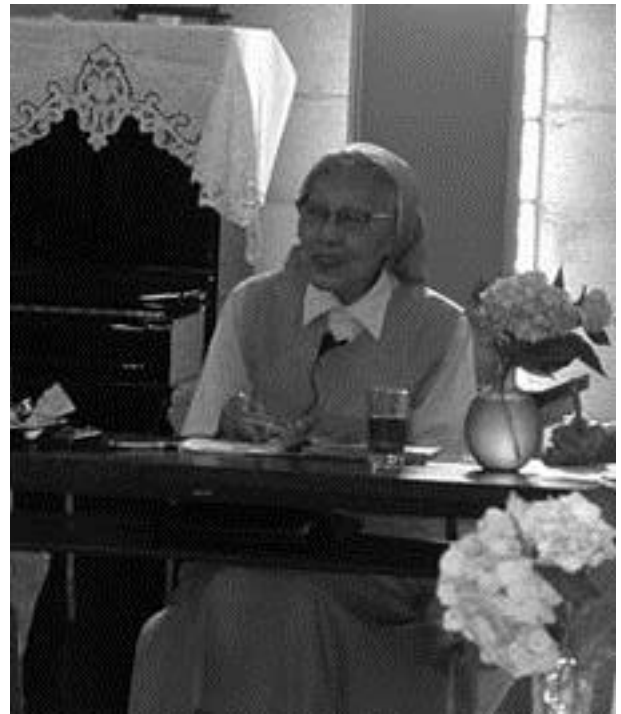
## <ラッサール神父の思い出>

7月7日は、ラッサール神父様の没後15年目の命日でした。この日は、午後6時から記念聖堂の地下聖堂で、三末司教様の司式で追悼ミサが行われました。これに先立ち幟町教会では、援助修道会三篠修道院のSr.レティチア天野さんをお迎えし、ラッサール神父様を偲ぶ会を催しました。当日は、急な呼びかけにもかかわらず、約40名近い方の出席があり、Sr.天野のユーモアたっぷりのお話に出席者全員が時を忘れて聞き入って居られました。以下に、Sr.天野のお話の一部をご紹介します。

私が、初めてラッサール神父様とお会いしたのは初誓願の前でした。修道院に入って修練期の3年間は済むと、初誓願があり、テストのような面談がありました。その時、ラッサール神父様にお会いしました。昭和21年のことです。その面談で、ラッサール神父様から「この修道院は煉獄みたいですか?」と聞かれました。援助修道会は、何を援助するかというと、煉獄の靈魂を援助するのです。生きている人達が、亡くなった人達のためにお祈りをして、犠牲を捧げて、負い目を無くし、一日も早く神様にお会いできるように援助するということなのです。

初誓願を立ててから6年間広島にいました。1950年の定礎式には参加しました。終生誓願の時は、九州の八幡に居りましたので、1954年8月の献堂式には、出席できませんでした。幟町教会に来たのは、トラ神父様が主任司祭の時の1958年でした。翌年、ラッサール神父様が3度目の幟町教会の主任司祭になられた時から、3年間ラッサール神父様の手伝いをしました。

広島に来て、神父様に挨拶に行った時、神父様は大聖堂の脇にある香部屋の小さな部屋で寝起きされておりました。その時、「明日、三次教会の献堂式があるから行ったらどうですか。」と言われ、行きました。神父様は幟町に来られてから、三次教会、向原教会、廿日市教会などを創られました。背が高く、鋭い目、心を見通すような眼をされておりました。それでいて慈愛深い眼をされる時がありました。本当にあまり偉すぎてよく分かりません。



(お話しをされる Sr.レティチア天野)

神父様から「貴方は、女性部を担当してください。」と言われました。特に、家庭訪問を徹底的にやして下さいと言われました。ところが、幟町の司牧地域は広く、東は西条、南は呉、北は可部から芸北町まであり、大変でした。教会の信者名簿を持って、毎日、家庭訪問をすることになったのです。

婦人会の人への訪問は、昼間に行けば良いのですが、姉妹会の方は、昼間、勤めている方が多いので、夜に訪問しました。そして、3年間の家庭訪問を担当して得たことは、沢山の教会外結婚者が居られることを知ったことです。カトリック信者は、司祭の司式で結婚することになっています。神社とか別の所で式を挙げる結婚を教会外結婚と言っています。教会に連絡しないで、自分が信者である事も家族に言わないで又は言っても理解がないので言わないで、別の所で式を挙げる。信者は、司祭の立会で結婚の誓いをしないと正当な結婚と認められない。とするとその結婚はどうなるのですか、その結婚生活は罪の状態です。その人達は、それっきりで教会から遠ざかり信仰から離れます。ラッサール神父様は結婚問題を非常に重大視され、出来るだけ正当な結婚に直しましょうと言われました。司祭の立会で結婚の誓いをし直す。そのために、色々な事情を聞いて下調べをし、初婚同士か、結婚歴があるか、離婚歴があるか、そういう複雑な事情は、ローマに申請をす

る必要があります。その直しのために二人そろって司祭の前に来なければならない、これがとても難しいのです。もう夫婦になっているのに今更何で教会へ行かなければいけないのか。理解のないご主人と一緒に教会へ来ることは難しいことでした。神父様は、よく家庭訪問の形で、二人が揃っている所に訪問されました。証人が二人必要です。近くの信者さんに来てもらって、神父様の前で誓いの言葉を交わす。これで、結婚は成立です。こうして、沢山の信者さんが教会に帰ってくる事が出来ました。

ある時、神父様とある夫婦を訪問した時、ご主人は宮司さんでした。神父様は、宗教の話や世間話や、神道の話を変えたりして、色々な話をしながら、ご主人を説得され、立派に結婚を直されました。神父様の知識の深さに感心したものでした。

ラッサール神父様がおられる時に、最初で最後の教会運動会がありました。運動会へ教会外結婚の二人を誘ってみると、来られたので、神父様の前に二人を連れて行き、結婚の直しを行ったこともありました。結婚によって、信仰生活が影響され、信仰の曲がり角になりうる重大さをラッサール神父様から学びました。結婚は一生の事だけではなく永遠の救霊に大いに影響があることを学びました。

記念聖堂の地下聖堂の東側に地下に入る階段があります。私が幟町教会へ来た時には、その出入口の所に小さな小屋がありました。荷物を置いたりする部屋と修道院がありました。そこにシスターが三人いました。音大に通っているシスターとイタリア人のシスターがいました。イタリア人のシスターは、料理が上手で、神父様が流し台とプロパンガスを設備してくださったので、彼女は、婦人会の方にイタリア料理を教えていました。プロパンガスがあり、ストーブもあって、とても良かった。私が居た三篠の教会は、部屋にストーブもなく寒かったので、幟町に来てストーブにあたり、本当にありがたかった。そのように神父様は、色々との付く人でした。

神父様の部屋は、司祭館の受付の隣でした。受付の部屋と神父様の部屋の境は二重扉になっていました。相談をするときに話し声が聞こえないようにするためです。最初これを見たときには感心しました。神父様は、教会を作るなどの大きな仕事をされてい

ましたが、小さな事にも気を配られていたからです。

広大病院へ行った時のことです。神父様が階上から童貞様と声を掛けてこられ、眼の不自由な方を紹介されました。その後、その方の家庭の方へも行ったりしました。神父様は、信者一人一人に対して慈愛深く、愛をもって接して居られました。私は、本当に神父様をみて、そう感じました。

神父様は、行動的な方でした。「小原先生という茶道の先生がいらしゃるからお茶室を建てます。」と言われ、アツという間にお茶室が前庭に建ちました。今度は、信者会館がないからと云われて、あれよあれよという間に信者会館が建ちました。3年間お手伝いしましたが、神父様は偉すぎて、大きすぎて分かりません。平和記念聖堂を建てると言えば、当時の吉田首相や高松宮殿下などのお偉方を立て、後援会を手際良く、大規模に作られる。聖徳があり、神様を愛し、一人一人の信者さんを心から愛して、行動的、外向的な手腕、指導力、博学、日本語は日本人が顔負けするほど上手で顔を見なければ外人とは思われない程でした。

1954年、平和記念聖堂の献堂式はありましたが、聖堂は完成していませんでした。ラッサール神父様が主任司祭の2年目の時にモザイクの専門家の技師さん二人がドイツから来られ、大祭壇の奥に大きな高い足場が作られ、何ヶ月もかかって完成しました。その年のクリスマスは、足場のある祭壇で行われました。この時、聖堂のステンドグラスは、全部入ってなくて、1962年にイエズス会から教区司祭に司牧が任された時に、外国から聖堂の一番上のステンドグラスが届き、嵌め込まれました。その日に、大きな式典があり、ラッサール神父様が心血注いで建てられた聖堂が完成した日に新しい若い神父に教会を委ねて教会を去られました。その時の心境は、どんなだったかと考えます。日没の赤々と輝いた荘厳な夕暮れと神父様が幟町教会を去られる時の様子が重なり合います。それは素晴らしい引き際でした。

その後、結婚問題は、大事な事ですから、1963年に「カナの会」ができ、41年間活動が続いています。

(文責：幟町教会 社会部)

## 世界平和記念聖堂献堂50周年 を迎える祈り

### 【今月の祈り】

#### 10月の意向

「平和を宣べ伝う」

(ミュンヘン市から寄贈された説教台の銘文)

世界平和記念聖堂の内陣の祭壇に向かって左側の側廊の柱に説教台があります。これは、1956年にミュンヘン市から広島市に贈られたものです。

下の写真は、1956年8月5日に行われた献堂記念荘厳ミサの時の荻原教区長の説教風景です。

このときには、原爆慰霊碑の前で原爆犠牲者慰霊および世界恒久平和祈願式典を行い、本通り商店街を記念聖堂まで提灯行列を行っています。広島教会に集う皆が、こころを一つに「平和を宣べ伝える」ために行動を起こし、呼びかけに応えました。毎年行われる平和行進も「平和を宣べ伝える」ために多くの人の参加で引き継いで行きたいものです。



(説教をする荻原教区長(1956年8月5日))

この時は、大理石の仕上げがなされていない。

司教館所蔵(斉藤教区長秘書撮影)

### (聖書の言葉)

私の兄弟たち、自分は信仰を持っていると云う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。……信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。(ヤコブの手紙 2・14~17)

### (黙想)

### (祈り)

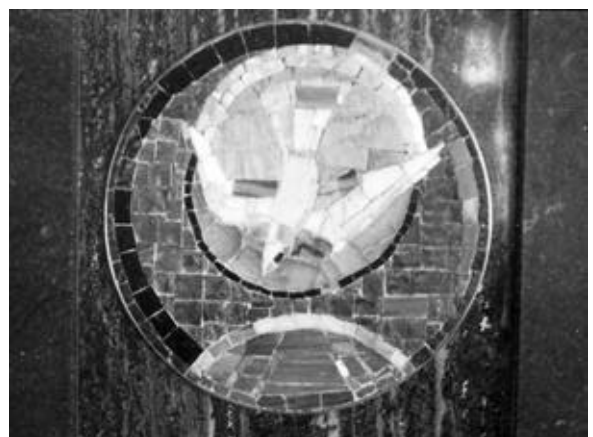
「正義を実践して平和をつくることをお互いに誓おうではありませんか」とヨハネ・パウロ 世は、平和アピールを通して私たちに呼びかけています。

「平和がないのに、彼らが『平和』だと云って、わたしの民を惑わすのは、壁を築くときに漆喰(しっくい)を上塗りするようなものだ。漆喰を上塗りする者に云いなさい、「それは、はがれ落ちるぞ」と。豪雨が襲えば、雹(ひょう)よ、お前たちも石のように落ちてくるし、暴風も突如として起こる。壁が崩れ落ちれば、「先に施した上塗りはどこに行ったのか」とお前たちは云われるのに違いない。」(エゼキエル 13・10-12)と主は仰せられる。

正義の実践を通して、喜びのうちに平和を作り出す知恵と勇気をお与えください。 アーメン

ヤコブの手紙は、ペドロ・アルペ著「キリストのこころ」59ページ、エゼキエルは、本田哲郎「平和アピールを読む」26ページを参照。

「今月の祈り」は、幟町教会が担当しました。



(説教台にある鳩のモザイク)

## 資料紹介

戦後、ラッサール神父をはじめ、イエズス会の宣教師たちは、エリザベト音楽学校のザベリオ・ホールを拠点に講演会や音楽会を開催し、カトリックの教えを熱心に布教していた。信者たちもこれに応え、「広島カトリック劇団」を結成し、聖劇を通じてキリストの教えを広めるなどの様々な活動を行い、役割の一端を担っていた。

このような布教活動の中で、ラッサール神父は、JOER ラジオ中国(現在の中国放送)を通じて「日本の宗教とカトリック教」という放送を行っている。ここに、放送された内容を冊子にした資料からこの事実を伺い知ることが出来るのだが、どの様な経緯で放送が行われたのか、仔細は不明だ。この資料は、援助修道会のSr.レティチア天野が持って居られた。

「現在ほど世界平和の問題が各国の人々によって真剣に考えられ、世界各国国民が恒久的平和の実現を熱望している時代はないと思います。世界各国の人々による平和のための運動、会議更に国際連合の如き国際機構によって戦争を避けるために不断的努力が続けられておりますが、私共から戦争の脅威は一向になくなりません。そうして軍縮どころか再軍備の傾向さえ次第に強くなってきております。

本日、私は皆さんと共にこの世界平和の問題を徹底的に取扱うために、次の問題について少し考えて見たいと思います。」と世界平和への道(第4巻)で説いている。

「日本の宗教とカトリック教」(1~8巻)

愛宮 真備 著

内容: 1巻「序」(20ページ)

2巻「人間の目的」(44ページ)

3巻「世界平和への道」(15ページ)

4巻「唯物論の非難」(20ページ)

5巻「宗教の必要性」(15ページ)

6巻 この巻は、揃っていない。

7巻「神の本質」(27ページ)

8巻「天啓について」(32ページ)

昭和29年11月2日初版(B6版)

発行所: 広島カトリック布教本部

## 部会報告

<総務部会>

9月11日に常任委員会を開催。献堂50周年行事に要した費用の中間決算と記念誌の基本フレームについて検討した。また、聖堂維持部会を開催し、修復保存の検討の必要性、50周年の終わり方など今後の活動について話し合った。

<平和活動部会>

9月4日に第10回部会を開催。世界平和記念聖堂のスケッチ募集、平和の歌募集について、審査の方法、展示・発表の方法などについて検討した。11月7日に第3回平和学習会(渡部朋子さん「アジアの友と手をつなぐ広島市民の会 代表」の講演を予定。)について実施方法などを検討した。

<記念誌部会>

9月18日に部会を開催。常任委員会の検討結果の報告を受け、記念誌の具体的な作業の方法を検討した。次回、構成フレームに沿って誌面の割り付けを行うこととした。



(聖堂の扉の把手にあるユーモラスな動物の顔)

### 献堂50周年ニュース

vol.01 10月号(No.9)

2004.10.01 発行

(編集・発行)

カトリック広島司教区

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会

常任委員会

〒730-0016 広島市中区鞆町4番42号

Tel 082-221-6017

ホームページ <http://www.hiroshima.catholic.jp/>